

～異世界転生～ 道化師勇者も最初はクソザコでした!?

からすて

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界転生したうえでつけられた”道化師”という称号その理由は過去に起こしたある問題が理由だった！ヒロインと過去の問題をどうしてもないことにしたい勇者の冒険ファンタジー

初心者なのであたたかくみまもってください

週3投稿

目次

第1話

〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	2		4
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	3		7
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	4		11
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	5		15
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	6		19
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	7		23
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	8		27
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	9		31
〜異世界転生〜	道化師勇者も最初はクソザコでした!?	10		35

第1話

どうもはじめまして！小説作り初心者のからすと申します。
前から書いてみたかった小説！ついに！異世界転生ものとして
きょうから投稿させていただきます。

はじめてなもので何故か緊張しています笑

初心者なんで、ん？つてなることも多いと思いますが、そこは暖かい目で見守ってください！

ではく異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?
始まります！

異世界に転生して三年きょうもきょうとで森への安全確保のために
パトロールに来ていた勇者

勇者

「今日で罪をおかしてから三年かずいぶん早かったな」
しばらく歩いていると狼の”形”をした魔物が現れた

勇者

「またコイツらか三年前からなにも変わってねえな」

魔物 A. B. C

「シューグルル」

勇者

「まあさっさと終わらせてかえるか」

シューカカカカーン

???

「なんだあの化け物じみた技は」

勇者

「!?」

視線に気づいた勇者は後ろを振り返る

勇者

「誰もいねえ……勘も鈍ってきたなチクショウ」

???

(危なかったらみつかつたら殺されそうな目してるな、さっさとかえろ)

勇者

「こんなところで何してるのお嬢さん♪?」

???

「みつかったたー！ー！！！」

???)は勇者すら追い付けないほどの早さで国へ帰っていった

勇者

「はくやっぱりおれのことは覚えてねえか、まあむりもねえな」

アラスト国内、町の一軒家にて

ミリカ母

「ちよつとミリカ!どこいったの!」

ミリカ

「ちよつと森の方まで…」

ミリカの母は絶望したような顔でミリカを見つめる

ミリカ

「ごめんなさい…」

ミリカ母

「何度行ったらわかるのあの森へ入れるのは国王さまと勇者さまだけって」

それもそのはずあの森に潜む魔物はどんな凄腕ギルドも倒せないほどのばけものばかりだからだ

ミリカ母

「あなた勇者様にあってないでしようね」

ミリカ

「会ってないよ」

ミリカ母

「そう、ならいいわ」

トントントン

ミリカ母

「はい」

ミリカ母は玄関に向かう

ミリカ（なんで勇者様に会ってはいけないんだろう他のみんなはあつて話までしたことあるのになんで私だけ…）

アラスト城にて

勇者

「ただいま帰りました〜」

国王

「おーずいぶん早かったなさすが最強勇者じゃ」

ここで国王はいつも通りの質問をする

国王

「娘にはあっていないだろうな?」

勇者

「もちろんです…ですが姿を見ました」

国王

「お前は強くなりすぎただからこそあのときみたいには、ワシの娘とはなか良くできん、これはお主がみずから選んだ道だわかっているな?」

勇者

「もちろんです」

なんでこうなってしまったんだろうと勇者はまだ異世界に転生する前を思い出した。

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?!? 2

2話ナンと殺しと女の子

日本のどこかにて

村田光啓

「あ、やっちゃまった…この遺体どーしよ」

光啓は朝10時22分に自分のナンを勝手に食べた男を殺してしまっていた

村田光啓

「まあとりあえず冷蔵庫に入れとくか」

ガサガサガサガサ

村田光啓

「この冷蔵庫入らないんだけど(チツ)じゃあどこに隠せつて言うんだよ」

冷蔵庫に遺体が入らないのを確認しどこかに移動する光啓

村田光啓

「よしとりあえずこのままこの家に放置しておこう鍵かけときゃ絶対ばれないでしょ」

みりかは親と離れてしまい、親を探している途中にとある一軒家に

ついた

新野みりか

(やばいこれって絶対みちやいけなかったやつだ)

ガコッ

みりかが動くことなりにある椅子を倒してしまった

村田光啓

「おい、そこにいるのはだれだ!!」

新野みりか

「ミャーミャー」

村田光啓

「なんだ猫かって言ってほしいのか?」

新野みりか

(あつ終わった(?!?!))

新野みりか

「すいませんすいませんすいません親とはぐれてしまって、わざとじゃないんです!誰にも言わないからゆるしてくださいー!ーい」
みりかはめにも止まらぬ早さで家を出ようとする

村田光啓

「まあまで、おれは悪いやつじゃない」

光啓は遺体を持ちながら言うとても説得力がない

新野みりか

(ここでもたないと殺されるこの悪いひとに殺される)

村田光啓

「ちよつと一緒に来てくれよ、な?」

光啓はみりかを強引に車にのせる

新野みりか

(だれか…助けてお願い)

みりかが心のなかで祈ると横から信号無視をした車が勢いよくぶつかってきた

ガッシャーン

新野みりか

(あつ死んだ死ぬんだ)

みりかが思うそう思っていると光啓がナンをとりだした

新野みりか

(まさかあのナンはなにか役に立つの?もしかしてあのナンで異世界転生とか?夢にまでみた展開キター)

男はナンを食べただけだった

そしてあっけなく光啓とみりかの人生は終わった…

村田光啓

「いつてえ、なんでおれがこんなめにあうんだよまあひとを殺した罰かなクツソ」

???

「お前を、これから異世界に飛ばすそして罪を償うのだ」

村田光啓

「なんだよ異世界って馬鹿げてるな」

新野みりか

「へ、異世界?異世界だつてー!ー!ヨッシャー行きます行きますーす」

???

「ではこれからお前らは共に行動し二年いないにナンの妖精を助けてこい二年で助けられなかったらお前らの縁をきり、片方の記憶を消すそうなたらもう日本には帰れないと思うんだな」

村田光啓

「なんでこんなガキとふざけた妖精を助けなきゃいけないんださっさ

とおれをもとに戻せ」

???

「お前が妖精を助けたそらこの少女と共に事故の前に帰してやろうでは、がんばるんだな」

パアアアアアア

二人は光に包まれた

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?!?3

え? 本当にここ異世界なの!?

???

「あつ異世界転生者なのに強くするの忘れてたこのままじゃスライムに一撃でやられるクソザコになってしまう…まあいいかほっとこ」

こうして光啓とみりかは異世界転生者なのにクソザコとして転生したのであつた

一方光啓たちは…

みりか

「ワアアアーーーーー落ちるーーーー」

光啓

「ていうか落ちてるーーーー」

みりか

「え、こここここれちゃんど助かるよね? 助かるよねおじさーん」

光啓

「助かる分けねえだろっていうかまだ23だからおにいさんだろ

がーーーーー」

ド

ゴーン

勢いよく地面と衝突する光啓とみりか

みりか

「あれ？いきてるの？私」

光啓

「なるほど、、、これがギャグ漫画理論か」

みりか

「なるほどギャグ漫画理論ね」

みりか

「ていうか、ここどこ？」

空から落ちてきた光啓とみりかその落ちた先は硬い岩のような場所だった

光啓

「ここでいうことがある、いいことと悪いこと1つづつだどっちからききたい？」

みりか

「じゃあいい知らせ？」

光啓

「無事に異世界についたらしいこの土地は地球で見たことない」

みりか

「じゃあ悪いことは？」

光啓

「この小さな山みたいな鼻じゃない？」

みりか

「え、それつてもしかしていわゆる」

光啓

「そうだこれが死亡フラグだ」

ドラゴン（仮）

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

光りか（みつひろとみみりかの略）

「うわぁー！ーダズげでー！ー！ー」

みりか

「!!!（。 ㇿ。 ）ハッ!!!でも異世界転生なら私たちは強いはず！お兄さん（笑）戦おうよ！」

光啓

「そうだな異世界転生してるなら絶対強くなってるよな」

もちろん死亡フラグである

光啓

「よし拳に力を貯めてε||ε||ε||（?・∩・?）ドリヤアアアポ
フツ」

光りか

「へっ?」

光啓はドラゴン（仮）にしっぽで貫かれる

光啓

「グゴホツΣ（・∩・?）」

光啓2度目の死

みりか

「何がおこってるの?ここって本当に異世界?とりあえずお兄さん
持って逃げなきゃ」

みりかは光啓を持ち上げる

みりか

「重いッこんなん運べないよ！」

ドラゴン（仮）

「ブゴガオオオオオオオオオオ」

ドラゴン（仮）が吹く炎をもろに食らうみりか

みりか

「もうダメだ、異世界でも死ぬんだ、私たち主人公補正かかると思った
んだけどな、ハハ」

???

「もう大丈夫絶対死なせないから」

みりか

(ナンの形?)

みりかはナンの妖精と気づく前に意識がどだえてしまった
なんの妖精

「この子達弱そうだけど本当に異世界からきたのかしら?」

光啓

「なんで異世界から来たって知ってるんだ、ダメだ口が動かねえ」

バタツ

光啓も倒れ込んだ

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?! 4

ナンってこの世界にもあるの!?!ナンってナンナンだろうナン

新野みりか

「ふぁーよく寝たく………って行ってる場合か！ウツ背が、」

村田光啓

「おっようやく起きたか、今はまじで動かない方がいいぞ、今俺らには生きてるのも不思議なくらいな怪我があるからな」

村田光啓

「ところで嬢ちゃん名前は？」

新野みりか

「なのりたくない」

村田光啓

「は？」

新野みりか

「じゃあおじさんからなのってじゃないと教えない」

村田光啓

「俺は滝沢信二だ」

光啓は平然と嘘をつく

新野みりか

「私は新野みりか信二おじさんこれからよろしく」

村田光啓

「プッ」

新野みりか

「何が面白いの？」

村田光啓

「いや、なにもなにも」

新野みりか

「ていうかここどこ？」

村田光啓

「ここはアラスト国っていう国一の病院らしい俺らは病人だ」

新野みりか

「だれが助けてくれたの？」

村田光啓

「おいおい、俺だってなんでもしってる訳じゃねえんだぜ？」

新野みりか

「そっか、ごめん」

トントントン

看護師

「おっ、ヤッお起きしましたか？とりあえず昼御飯ですよー」

テーブルに並べられたのは三枚のナンだった

新野みりか

「これってナン？何でナンが？しかも単体」

村田光啓

「朝御飯も（クチャクチャ）ナンだったぞしかも単体」

看護師

「ナン食べたこと無いんですか？」

新野みりか

「いやありますけど給食とかで」

看護師

「給食？まあよくわかりませんが喉につまらせないようになだけきおつけてくださいねーではまたあとで」

ガチャッ

新野みりか

「これからしばらくナンなのか：ナンナンだよー、信二さんは苦痛じゃないの？ナンばっかで」

村田光啓

「苦痛じゃないむしろ好物だ、ナンは命だからな」

新野みりか

(あっそうだったこの人死ぬ前にもナン食べてたわ)

新野みりか

「まあ、食べてみようとりあえず」

みりかはナンを口にした

新野みりか

「うん、微妙、可もなく不可もなくな味してる」

村田光啓

「ナンをバカにするなあ！！！！」

新野みりか

「わっ、ビックリしたく急に大声出さないでよ！」

村田光啓

「てか問題は、ナンのことよりこの世界のことだよ」

新野みりか

「そうだよ！異世界転生者なのに全然強くないよ！私達」

村田光啓

「これじゃあナンの妖精とやはつかまえられないかもな」

新野みりか

「それじゃあもとの世界にかえれないじゃん！」

村田光啓

「よし、こうなれば一択だ、筋トレするぞ傷なおったらな」

新野みりか

「ええ、そんなんで強くなれるかな？」

傷は次の日の朝なおった

〜二日後〜

村田光啓

「フンツ、フンツ、フンツ、ふーっ！今日はこのくらいか」

新野みりか

「無理しすぎはよくないよ！もうけがなおってからずっと筋トレじゃ
ん」

村田光啓

「だいぶ強くなった気がする、よし明日スライムでも探して戦ってみ
よう倒してレベルアップだ！」

新野みりか

「よーっ！しだとすれば看護師の人に伝えてくるね明日出ますって」

村田光啓

「おう、よろしく！」

そして次の日本当に旅に出た

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?5

光啓とみりかはスライムあたりを倒すために国のすぐ近くにある平原にやって来ていた

光啓

「どこにスライムいるかなー」

ペタツペタツペタツ

みりか

「なんか変な音しません?」

光啓

「音?どんな音だ?」

みりか

「こーう、なんというか、ペタツペタツみたいな音です」

光啓とみりかは後ろを振り返る

光啓

「あつスライムだ」

みりか

「だとしても、なんか大きい感じが」

光啓

「どこのスライムも同じってことはないだろ」

みりか

「それもそうですね!」

スライム

「キュー」

みりか

「可愛い〜」

光啓

「鍛えた筋肉さえあればこんな弱そうなやつ倒せそうだな」

ちなみにこの世界は剣や魔法じゃないとモンスターは倒せません

光啓

「おりゃッ」

スライム

「プニゅ〜」

みりか

「あ、また終わった」

スライムはキレた

光啓

「なんか赤黒く色変わったけど大丈夫そう？」

ドゴーーーーーン

光啓は大ダメージを食らった

光啓

「イテテこんな強いのかこの世界のスライム」

みりか

「信二さん！もう一発きますよー！」

光啓

「逃げよう」

光啓とみりかは全力で国に逃げた

光啓

「まだついてくる〜助けで〜」

みりか

「いつまで逃げ回るんですか〜」

ブジュツ

???

「大丈夫だったか？」

光啓

「ありがとう助かったよ」

???

「俺の名前はサエリカ名前はこれでも男だ」

みりか

「え？見た目も女の子じゃん！」

サエリカ

「失礼だな！　というよりナンでスライムに追われてたんだ？」

光啓

「カクガクジカジカで」

サエリカ

「この世界のモンスターは普通の打撃じゃ攻撃できないって教わったことぐらいあるだろ？」

光啓

「え？　そうなの？」

サエリカ

「もしかしてお前ら教養が無いのか？」

みりか

「この人はなくても私はあります！」

サエリカ

「そうか、ならこれからいろいろ教えてやろう嬢ちゃん名前は？」

みりか

「私はみりか向こうの教養が無い男の人は信二です！」

サエリカ

「ミリカと、シンジか珍しい名前だな、まあいいついてこい」

こうしてみりかと光啓はサエリカの家までついていくことになった、その道中

国人

「キヤーサエリカくこつち見てーサインちよーだいー」

光啓

「お前人気者だなこれで56人目だぞ同じこと言われんの」

みりか

「あなたはいつたいなにもの？」

サエリカ

「俺はただちよつと強いモンスターを倒しただけだぞ」

光啓

「そんなけであんな声かけられるか？　女ならまだしも男にまで…」

みりか

「まあそんなけ人気なんですよね！さすが私達を助けてくれた救世主様！」

サエリカ

「急に救世主扱いは気持ち悪いぞ笑」

サエリカ

「おっとここが俺の家だ」

みつりか

「広すぎるだろ！！！！」

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?!6

光啓

「でかすぎる…なんだここ」

みりか

「うちの二倍はある、」

光啓

「おまえんちも充分でかいやん!」

なんとサエリカの家はナンでかぞえて縦1500枚、横2000枚くらいの大きさがあったのだ!

サエリカ

「まあ、一樣俺は上の位の人間だからな”一樣な”」

光啓

「一樣ってどうゆうことだ?」

サエリカ

「すまない、初対面の人に話せる内容ではない」

みりか

「それよりさあ!!早くスライムにも勝てるようにしてよ!」

サエリカ

「そうだなまずはそこからだな、お前らのレベルはなんだ?」

光啓

「レベル?なにそれ」

サエリカ

「肩に描いてあるだろ?」

みりか

「ほんとだー!ってあるー!」

光啓

「……」

サエリカ

「みりかは1か、光啓黙りこんでどおした？」

光啓

「無い、」

みりか

「根性？」

光啓

「レベルが描いてない」

サエリカ

「は？おまえ何歳だ？」

光啓

「23」

サエリカ

「よく聞けレベルは5歳から出てくる。ん？ということはお前らは何者なんだ？」

光啓

「オレヲハトオリスガリノタビビトデス」

みりか

「それ嘘ってわかるやつー」

サエリカ

「もしかして転生者か？」

みりか

「そうそう！私達を死んで転生してきちやっただけなの！」

サエリカは剣を取り出す

みりか

「へ？」

サエリカ

「ならば捕らえなければならぬ国王にナンの妖精の仲間の転生者がいるはずだからみつけたら捕まえてこいと言われている。」

光啓

「わかった最後にこれだけ教えてくれ」

サエリカ

「一つだけだぞ」

光啓

「どうやったらレベルもらえる?」

サエリカ

「また、生まれ変わって五歳になるんだな!」

みりか

「やっぱりそこからか、うん諦めよう」

光啓とみりかはまたまた逃走した、だが後ろから64人のサエリカファンに捕らえられ国王のもとに強制連行されていった、

光啓

「まじついてねえ死んだあげく異世界でもこの様かよ、」

みりか

「まあまあまだ死ぬと決まったわけではないですから」

国王

「きさまら一ヶ月いないにカースドラゴンの目を持ってこい」

光啓

「え?、むりじゃね? 国王! 僕たちスライムも倒せません!」

国王

「ちようどいい貴様らを死刑にするためにはもってこいの依頼だな」

みりか

「なんで死刑」

国王

「ナンの妖精がいなかったら困るんでなこの依頼を達成できなかつたら死刑だ、もし達成できたら勇者の称号と同時に嘘つきと意味を込め道化師という称号もくれてやるハッハッハッせいぜい頑張れ」

光啓

「みりかおまえが倒せ」

みりか

「へ?なんで?」

光啓

「レベルがあるのはおまえだけだよし明日から特訓だー」
こうして次はみりかの特訓がはじまる

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?!? 7

ナンを食べてばわーあつぷ

みりか

「私が修行するなんて乙女になにさせてるんだー」
みりかはタイヤを引いて国一周するというありきたりだがきつい修行をしていた

光啓

「おい、もつと速くできないのか?」

みりか

「いいですねえ信二さんは見てるだけで」

みりか

(レベル100になったらおぼえとけよ)

テレテレテレレレーン

光啓

「この音はもしや!」

みりか

「レベルアップ?」

ナンを獲得しました

みつりか

「は？」

アナウンス

只今のナンの所持数1マイですあと99マイ集めると1レベルアップします

みつりか

「まってナン一個もらうのに三時間かけてる」

光啓

「おれちよつとぶらぶらしてくるわ、ちゃんとやつとけよ！」

光啓はサエリカにおわれていることを忘れ国に戻る

みつりか

(サエリカにつかまればいいのに)

みつりか

「よーし私は私でがんばるぞー」

ペッタペッタペッタ

みつりか

「このおとつて…もしかして、」

みつりかは後ろを振り返る

みつりか

「やっぱスライムだー」

絶対絶命？

みつりか

「どーしよどーしよーあっちいけよー」

ベチッ

みつりか

「そうだ、打撃はきかないんだ！」

シユーン

みつりかはスライムを倒した

アナウンス

ナンを156マイてにいれました次のレベルまであと359マイです

みりか

「え？倒した？ていうか、レベル上がった？」

みりかは肩をみる

みりか

「あれ？でもーだ」

みりかは二時間考えた

みりか

「よし！ナンを食べよう、お腹減ったし」

モグモグモグ

アナウンス

レベルがあがりました現在のレベルは2です

みりか

「は？まっつて、本当に意味がわからん」

その頃光啓は

光啓

「この写真の顔おれじゃね？ふーんなになに逃走者みつけて捕まえてきたら2000000000ナンをプレゼントと」

この世界のナンはお金よりはるかに価値が高い

光啓

「よし戻ろう」

民衆

みつけたぞー

光啓は死ぬきではしる

光啓

「みりかあー！たすけてー！たすけてー！たすけてー！たすけてー！たすけてー！」

みりか

「信二さん！レベルあがり、ってどんなけ人つれてきてるんですかあー」

みりか

「やめてこっちこないでー！」

光啓とみりかは全力でにげたしかも森の方に

光啓

「ここまで来れば大丈夫だろ」

みりか

「え？もうつかれてるんですか？」

光啓

「おまえつかれてないの？」

みりか

「はい！レベルあがったんで、エッヘン」

光啓

「どうやってレベル上げたんだ？」

みりか

「スライムを倒したんですよそしたらめちやナンを貰えてそのあとしばらくしてお腹減ったからナン食べたらレベルあがりました」

光啓

「チートだな！」

???

「誰かあたすけてー」

光啓

「なんかありきたりな台詞はいてるやついるぞ」

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?! 8

おー、おー?おーー!?

光啓とみりかは先ほど助けを求めてきたなにものかに話しかけていた

光啓

「お前、ちっこいな、135くらいか?」

???

「ちっこいとは失礼だな!137cmもあるんだぞ!」

???は胸をはって言う

みりか

「んーちっこい、フォローしようもなくちっこい」

光啓

「せやなちいさすぎるな」

みりか

「こんな子供にかまってたら絶対捕まりますよアイツに」

光啓

「ごめんな、ぼっちゃん、お兄さんたち急いでんだ!助けを求めるなら他のやつにしてくれ!じゃ」

???

「まてまてまて、ツツコミたいところが多すぎる！」

みりか

「なんこあります？三個までなら聞きますよ」

???

「一つ目くなんでぼっちゃん？あたい女やぞ！」

光啓

「それはごめん初対面ってどっちかわからないよね！」

みりか

「で、2つ目は？」

???

「しつかり助けろ！話が進まないだろ」

光啓

「なんの話だ？おれらは急いでるんだ話してる暇なんて一分もない」

???

「三つ目く」

みりか

「急にはなしすすめたあー！」

???

「そのジジイおまえレベルないだろ？」

光啓

「は？なんでわかったんだ？」

???

「ふふふ、あたいならレベルの有無など二秒で見分けられるのだ！」

みりか

「わかりました、」

???

「何がわかったんだ？」

みりか

「交渉しましょう」

光啓

「なんで勝手にすすめてんの？」

みりか

「条件は一つです、私たちがあなたを助けますそのかわり光啓さんにレベルを持たせてあげてください」

???

「なるほどそれならいいだろう！あたいの名前はラストだ」

みりか

「名字は？」

ラスト

「名字？なんだそれ」

光啓

「名字ないのか、おまえだけなのかこの世界にそもそもないのか、まだ不思議はたくさんだな」

ラスト

「この世界ってことはお前は異世界転生者だな、よし、余裕で違法だな！」

光啓

「は？違法？なんで、つれてこられただけだぞ？」

ラスト

「あたいが犯罪だ！あの国ではかつて異世界転生者に滅ぼされかけたからな！だから国からの呼び名は道化師のはずだ、まだ呼ばれてないか？」

光啓

「道化師か、まだ呼ばれたことねえな」

みりか

「道化師ってナンですか？」

光啓

「簡単にいえばピエロだな、なんで転生したらピエロなんだ？」

ラスト

「それはあたいたちが説明したら1年間石になるぞ！どこにいてもしゃべった瞬間な！ちなみに書いてもだめだ」

みりか

「じゃあだれがいつていいの？」

光啓

「たぶん国王とかやろ」

ラスタ

「ナンの妖精だよ」

光啓

「結局ナンの妖精かならばやくレベルを貰わないとあえねえなよし、速く教えてくれ！ラスタ！」

ラスタ

「んーわかった一旦寝たらね！」

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!?!9

光啓ナンの苦行

ラスト

「ムニヤムニヤ…そこは違うって!あたいのいうこと聞けよ光啓」

光啓

「こいつ、寝てるとはいえムカつく、なあみりか一発殴っていいかな?」

みりか

「まあまあ、信二さんそう怒らずに待ちましようよ」

待つこと二日

光啓

「おい、みりか、こいついつまで寝るんだ?」

みりか

「まあ、ロングスリーパーなんですよ!」

光啓

「なんだそれショートスリーパーしか聞いたことねえよ」

ラスト

「おい光啓!修行はしたか!」

光啓

「やっぱ寝言でもムカつく」

ラスト

「寝言じゃない起きとる」

光啓

「おつやつと起きたか！速くレベルあげる方法を！」

ラストはナンを225984枚だした。

みりか

「え！ラスト魔法使えるの？」

光啓

「さてこの量何に使うのか聞けよツツコムところちげえよ」

ラスト

「そうだぞ！魔法を使えるんだぞ！アタイ！」

みりか

「他の魔法は何が使えるの？」

ワクワクした目でラストをみる

ラスト

「例えばな！相手の心を読めるぞ！そいだなためしに信二を、」

光啓

「人の心をみるな！人の話を聞け！ナンを何に使うんだ！」

ラスト

「おい光啓そのナンを全部食べないとレベルもらえないんだぞ！」

みりか

「？光啓？」

ラスト

「こいつ名前に嘘をついてるぞこいつの名前は光啓だ」

みりか

「光啓？おじさんあとで話があります！レベルもらったね？」

光啓

「すみませんでした、ゆるしてください」

ラスト

「速く食え！そしてレベルをもらうんだ！」

そのあと光啓はたべたたべにたべた不思議とお腹がいっぱいには
ならなかった

そして三日後ついに！

光啓

「今何枚〜」

ラスタ

「今はちようど2500枚だ！あと223484枚だ！」

光啓

「無理〜〜〜たべれないよお〜〜みりかあ助けてえ〜〜」

みりか

「しょーがないな〜少しだけですよ！」

光啓

「ありがと〜」

みりかは死ぬほど早いスピードで23484枚たべた

ラスタ

「あーあ食べちゃった、みりか肩見てみ」

みりかは肩を見る

みりか

「260？え？ナンてれべるあがつてんの？」

ラスタ

「このナンは特別だから食べ終わったら800000レベルまでいけ
るようになってたのにサボるから！」

光啓

「じゃあおれもレベルあんじゃん！」

光啓は肩を見る

光啓

「無いですねはいレベルなんてありません」

ラスカ

「これ全部食ったら3もらえるぞ」

光啓は一ヶ月かけてたべた

その頃王国では

サエリカ

「すいません異世界転生者を逃しました」

国王

「まあよいいづれ捕まえられるだろう捕まえてすぐに殺すなよ事情徴収があるからな」

サエリカ

「わかりましたでは探してきまっする」

く異世界転生く 道化師勇者も最初はクソザコでした!? 10

みりか魔法を捨てる

みりか

「どうしよう、私が強くないとか」

ラスト

「これからみりかに魔法を教える！いったとおりにやれよ！」

光啓

「おもんねえなおれだけナン食ってなきやいけねんだぞ！」

ラスト

「お前は黙ってナン食べてろ！」

みりか

「お二人とも口が悪いですよ！」

光啓

「いいなーレベル高いやつはふざけないでくれよ！」

みりか

「あなたが情けないだけですよ、黙ってナンを食べてればいいのに」

ラスト

「みりか、こいつに構わず魔法を練習するぞ！」

みりかとラスタは森の奥へと消えていく

光啓

「ほんとにつまんねえな、よし！家でも作るか」

光啓は家作り、みりかとラスタは魔法の練習というようにバラバラになっってしまった

三時間後…

みりか

「なんで？何ででないの？」

ラスタ

「なんでいうとおりにできてるのに魔法がどれも出てこないんだ？」

みりか

「なにかが足りない、クソー！」

みりかはとてつもなくデカイ岩を殴る

ラスタ

「は？まっつてなににしたの？」

みりか

「もしかして、魔法がでない理由って武術が果てしなく強いからとか？んなわけないかー」

ラスタ

「そうかもしれん、みりかの力が変な方向にいつってしまったのかもしれない、とりあえず戻ろうみつひろのところへ」

そしてみりかとラスタはみつひろのもとへ戻る

みりか

「なんですか？これ、とてつもなくでかいんですけど」

ラスタ

「おまえナン食べ終わったのか？」

光啓

「これか？ちよつと暇だったから家作ってみた！わりと楽しかったぜ！あるゲームしてるみたいだった！」

ラスタ

「おまえはもうナンなんか食べなくても生きていえるんじゃないか

？」

光啓

「とりあえず内装見てくれよ！さあさあ！」

みりか

「お邪魔しまーす」

ボキッ

みりかはドアノブをはかいした

光啓

「へ？結構頑丈に作ったぞ？」

ラスト

「光啓、みりかの能力は怪力かもしれない」

光啓

「もうちよつとまってもっと頑丈につくる」

二時間後

みりか

「今度こそお邪魔しまーす！」

ラスト

「おーーすげえなんだこの豪華な家具は！」

みりか

「みてみてハンモック！」

バキッ

光啓

「みりか、なんもさわるな力の制御ができるまでなんもさわるな」

みりか

「はい！」

光啓

「ラスト、みりかに魔法を教えたんじゃないのか？」

ラスト

「それがカクカクジカジカでさ」

光啓

「ナンって何でもできるんだなすげえ、これで魔物が来ても平気か」

ピンポーン

光啓

「はい今出ます」

みりか

「どうやってインターホンつくったんだ？」

光啓

「誰ですか？」

サエリカ

「久しぶりだな」